

一般講演 12  
眼内レンズ・屈折矯正  
IOL/ Refraction correction

2022年10月13日(木) 16:30-17:30  
第9会場 | 東京国際フォーラム ガラス棟 7F G701

座長: 宮田 和典 (宮田眼科)

木-講演 12-5  
多施設共同研究による落屑症候群の白内障手術  
における水晶体と眼内レンズの偏心と傾斜

郷右近 博康<sup>1</sup>、神谷 和孝<sup>2</sup>、森 洋斉<sup>3</sup>、宮田 和典<sup>3</sup>、  
小島 隆司<sup>4</sup>、柴 琢也<sup>5</sup>、飯田 嘉彦<sup>1</sup>、庄司 信行<sup>1</sup>

1:北里大、2:北里大・医療衛生、3:宮田眼科病院、4:慶應大、5:六本木柴眼科

【目的】落屑症候群(XFS)の白内障手術前後における水晶体と眼内レンズ(IOL)の偏心と傾斜については不明な点が多い。今回国内多施設共同研究によってXFSの白内障手術前後での水晶体とIOLの偏心と傾斜について定量的に検証した。

【対象と方法】国内4施設(北里大学、宮田眼科、岐阜日赤、六本木柴眼科)において水晶体再建術を施行した115例115眼を対象とした。術前・術後3か月の時点で、前眼部光干渉断層計(CASIA2)を用いて水晶体とIOLの偏心量と傾斜量を計測し、術中チン小帯脆弱度に応じて分類し、それぞれ比較した。

【結果】偏心量は術前 $0.14 \pm 0.07$  mm、術後 $0.23 \pm 0.15$  mm、傾斜量は $4.88 \pm 1.46$  度、 $4.85 \pm 1.33$  度と有意な相関(Spearman's rank correlation coefficient,  $r=0.199$ ,  $p=0.033$ ,  $r=0.566$ ,  $p<0.001$ )を示し、術後偏心量は有意に増加したが(Wilcoxon signed-rank test,  $p<0.001$ )、術前後で傾斜量は有意差を認めなかった( $p=0.479$ )。チン小帯脆弱度は0度:59眼、1度:41眼、2度:14眼、3度:1眼、軽度(0~1度)と比較し重度(2~3度)で術後偏心量、傾斜量ともに有意に増加した(Mann-Whitney U test,  $p=0.035$ ,  $p=0.002$ )。

【結論】落屑症候群の白内障手術における偏心と傾斜は術前後で相関を認め、術後偏心量は有意に増加するが、傾斜量は有意な変化を認めない。重度チン小帯脆弱例では偏心量、傾斜量ともに増加しやすいことが示唆された。

【利益相反公表基準】該当有

【倫理審査】承認有 【IC】取得有